川西南の「西番」における民族識別（2）

－西番族の歴史の記憶

松　岡　正　子

目　　次

はじめに
1．ナムイ・チベット族の概要
2．西番族における民族識別
3．西番族における祖先の歴史とボン教
4．西番族における「西行取経」
おわりに

はじめに

本稿は，かつて「西番」と総称された，四川省西南部（甘孜州康定県以南をいう，以下，川西南と記す）に居住するチベット族について，西番族と称するサブグループのアイデンティティの形成と意味を考察するものである。

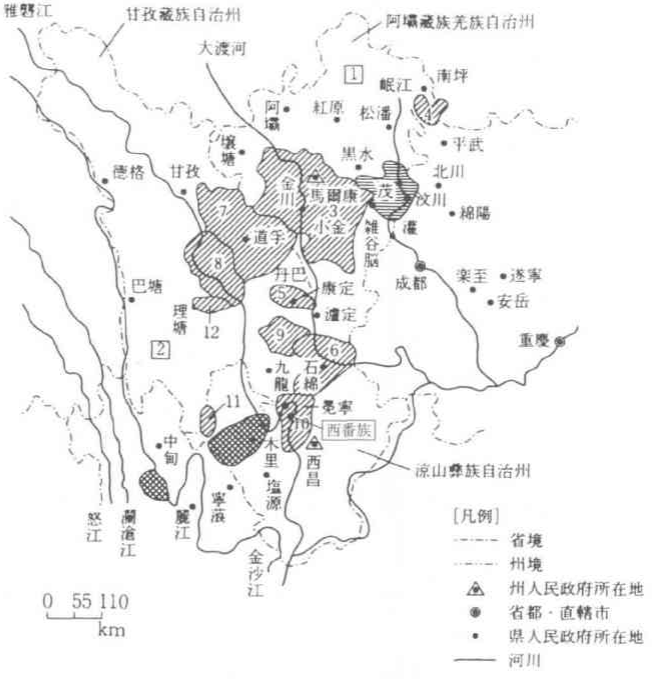
「西番」の民族識別あるいは民族意識は，これまでとりあげられることはあっても，あまり深く論及されることがなかった。しかし1980年代に費孝通が青藏高原東部の六江流域の「民族走廊」に関する民族識別問題を提起し，近年は，2003年11月に四川大学で「藏彝走廊歴史文化学術討論会」が開催され〔石碩，2005　：3～12〕，「藏彝走廊」研究として新たな展開をみせている。

このうち川西南の西番については，人民共和国下の民族識別工作を通して８つのサブグループの存在が明らかにされている（図１）。川西南の西番は，漢チベット語族チベット・ビルマ語系チャン語群に属する言語をもつ集団である。サブグループは，クイリャン，ジャバ，ミニヤック，アル

ゴン，アルスー，シシン，ナムイ，プミの８つの異なる言語グループに分けられており，チャン語との同源語彙の比率は，順に27%，23.1%，25.7%，21.3%，27.8%，25.9%，26.5%，28.9%で〔格勒，2002：38〕，同支系のサブグループとしての傾向を示している。

西番という語は，漢族が中国西部のチベット系民族につけた呼称である。このうち川西南「西番」のサブグループは，かつて「某羌」とよばれていたが，この一帯が唐代中期に吐蕃によって占拠されてからは，漢族から

〔図１〕四川チベット族の分布



1	アムド	821	7	アールゴン	45
2	カム		8	ジャパ	15
3	ギャロン	120	9	ミニヤック	15
4	白馬	12	10	ナムイ	15
5	クイリャン	7	11	シシン	2
6	アルスー	21	12	チュ	15

[出所]
四川省人口普查辦公室編『四川蔵族人口』（中国統計出版社，1994）4-6頁，孫宏開「六江流域的民族語言及其系属分類」（『民族学報』，1983）1983-3より作成。（松岡正子『青蔵高原東部の少数民族―チャン族と四川チベット族』ゆまに書房 2000年239頁より）

「番」あるいは「西番」とよばれるようになった。それは吐蕃の占拠とともにもたらされたチベット仏教が，やがて住民の間に深く浸透し，この羌人地帯を「吐蕃化」したからである。しかし漢族が漢訳した「番」には，吐蕃の自称である〔bo〕を音訳した「吐蕃の遺民」という意味と，「番」の漢字がもつ「蠻子」の意味があった〔王明珂，2003：182〕。そのため漢族側は「西番」を蔑称として用い，現地での聞取りによれば，西番側も「西番」と呼ばれて差別的な扱いを受けたという。よって人民共和国成立後の民族識別では，民族平等という原則のもとに「西番」という呼称は改めるべきであるとされた。しかし九龍県のナムイ・チベット族だけは改称を望まず，1980年代の第2回目の民族識別まで西番族を名のり続けた。

以上のように川西南の「西番」における民族識別においては，チベット族に改称することについて望むものと望まないものという全く相反する二つの意識が存在した。前者については，拙著「川西南の西番における民族識別（1）」（愛知大学交際問題研究所紀要　第126号）においてプミ・チベット族を事例としてすでに述べている。そこで本稿では，後者についてナムイ・チベット族を事例として考察していきたい。

本稿で事例としたのは，四川省の甘孜藏族自治州九龍県子耳郷万年村N組と同州冕寧県聯合郷木耳村M組，涼山イ族自治州木里藏族自治県倮波郷乾海子村P組で，ナムイ・チベット族が最も集中した居住地である。N組は2004年9月，M組は1994年8月と2004年9月，P組は2004年11月に現地で調査を行った。3村に関する資料はこの調査による。

1．ナムイ・チベット族の概要

ナムイ・チベット族は，四川省西南部の雅礱江流域下流の山間部に集中して居住する（図1）。分布地域は九龍県の子耳郷や木里県の倮波郷，冕寧県の聯合郷，和愛郷，健美郷などの3県に跨り，総人口は約1万5千人と推定されている（1994年）。

ナムイは，川西南の西番において自らを「大西番」と称して，他の西番とは異なることを誇っていた。しかし漢族は，西番の語を罵りの言葉として用い，街へ出たナムイはしばしば西番と呼ばれて蔑視された。冕寧県聯

合郷M組のＬＡ（男性・68歳）によれば，解放前，外地人は我々を「西番」と呼んだが，特に漢族と揉め事を起こした時にはしばしば西番という語を浴びせられた，という。そのためナムイの大部分が，1960年代の第1回目の民族識別においてチベット族に改称することに同意した，とされる。

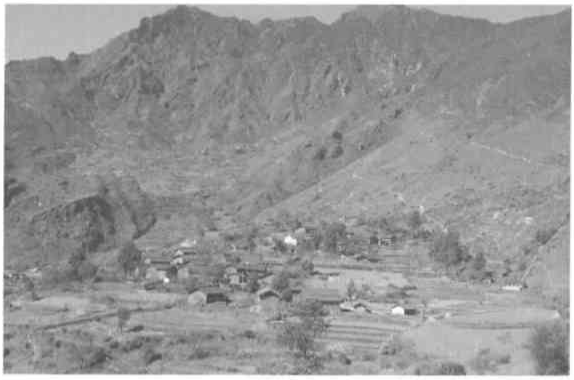
ところがナムイの中で九龍県のナムイだけは改称を望まず，1980年代の第２回目の民族改正までずっと西番族を名乗り続けた。実は，かつては漢族側も西番族をカム・チベット族とは明確に区別していた。民国時代には，九龍県内の民族として番，漢，猡，苗，西番の５族をあげている〔邊政設訂委員会編，1940：6〕。また1964年の人口統計でも，県の総人口24519人のうち，チベット族5155人に対して西番族272人と記され，西番族は特に子耳に117，八窩に103と2郷に集中している，とある。なお県内には，ナムイのほかにパムイ，ミニヤック，ガミ，リル，アルスーの西番がいて，それぞれ異なる言語をもっていた〔伍呷，1982：56～72〕。

しかし1980年代の第２回目の民族識別工作において，九龍県のナムイもついにチベット族に改められた。これは冕寧出身のナムイで，民族幹部であった穆文富の主導で決定したものであった〔松岡，2005：128～129〕。ところが九龍のナムイの約半数はそれを認めたものの，子耳郷のナムイだけはなお西番族であることを主張したという。

2．西番族における民族識別

九龍県子耳イ族郷は，西番族をなのるナムイが最も集中する地域である。郷内は，漢族とイ族，チベット族がそれぞれ34.6%，41.1%，24.2%居住し，チベット族のうち約３分の一の万年村に住むのが西番族である（表1）。ここは，元来はチベット族の居住地であったが，約300年前に漢族が，約100年前にイ族が移ってきたという。万年村は６つの組に分かれており，西番族はＮ組に最も居住している（写真１）。

子耳郷Ｎ組は，総人口194人，総戸数38戸で，西番族とイ族，漢族が共住する。38戸のうち西番族は最多の25戸を占め，イ族が７戸，漢族が６戸で，組の中心部に西番族，周縁部にイ族と漢族が住む（表２）。古老によれば，西番族はこの地に最初に定住した集団で，700年以上前のことであ



［写真1］西番族がくらす海抜2000mの子耳郷N組

る。N組は子耳郷の中では最も西番族が集中しており，長い間，西番族だけが住む土地であったが，人民共和国成立後に周辺地域からイ族と漢族が移ってきた。3つの民族は互いに婚姻関係を結ぶことはないが，日常の関係は悪くない，という。

N組の西番族は，1980年代の民族識別以来，公式の民族名がチベット族となった。しかし改正後もなお自分たちは西番族であるという意識を強くもっている。2004年11月に行った現地での聞き取り調査では，複数の住民に「みなさんは何族ですか，チベット族ですか」と聞いたところ，回答した住民のすべてが，自分たちは西番族でチベット族ではないと答えた。九龍県の西番族は，50年代の第1回目の民族識別で川西南の西番のほとんどがチベット族となり，九龍県以外のナムイもみなチベット族に変わった時に，そのまま西番を民族名であると主張し，暫定的に認められた集団であ

〔表1〕子耳郷の概況

村	海抜	小組	戸数	人口	漢族	イ族	蔵族	蒙古族	経済
庙子坪	1800	2	79	436					2
万　年	2200	6	212	1073	482	329	261	1	3
杜　公	2000	3	58	286	25	31	230		1
麻　窝	2500	3	109	539	126	413			4
銀厰湾	2600	4	178	885	46	551	288		5
計		18	636	3219	1115	1324	779	1	(順位)

［出所］2004年9月　現地での聞きとりにより作成。

〔表２〕万年村の状況

組	海抜	戸数	人口	漢族	イ族	西番族
尼瑪堡子	2000	38	194			◉
海子	2230	40	184		◉	
小堡子	1900	35	182	○		○
碉楼湾	1900	33	217	◎		△
磨子溝	2000	35	150	○	○	○
海子２	2230	31	145		◉	
計		212	1072			

［注］尼瑪堡子の西番25戸は李が17戸，朱が６戸，伍と文が１戸。
［出所］2004年９月　現地での聞きとりにより作成。

る。その意識がN組では20数年たっても変わっていなかった。

しかし実は，西番意識が変わっていなかったというのではなく，ほとんどの住民がチベット族に改正されたことを知らなかったということがわかった。M村の党書記（漢族・男性，50歳代）によれば，80年代の西番族の民族改正については，当時，民族幹部として信望のあった穆文富（ナムイ・チベット族，冕寧出身）の主導で決められたもので，住民に直接，諮ったわけではないという。換言すれば，チベット族への改正は彼らの日常生活にはほとんど影響がなく，日常の生活圏内では従来どおり西番族という名称が慣用的に通用していたのであった。

確かに，外観的には，彼らの生活は80年代に較べてそれほど大きくかわっていない。N組は，依然として急勾配の斜面を数時間，歩くか馬で行くしかない辺鄙な山間にあり，外来者が来ることもまれである。何百年もの間，ほぼ変わることなく自給自足的な暮らしが続いており，新しい電化製品といえば電気釜くらいで，テレビもほとんどみかけない。また婚姻も従来の習慣のまま，ほとんどが近隣の西番族との間で繰り返されている（図２）。しかし市場経済化の波も確実に来ている。多くの若者が農閑期には現金収入を得るために外地に商売に出ており，そのまま山を下りて春節にしかもどらない出稼ぎ者も少なくない。西番族の25戸のうち８割以上が外地へ働きに出ている者を家族に抱えており，一年間の大部分を老人と嫁と孫だけ，あるいは老人が孫の世話をして両親を出稼ぎにだすという家庭も

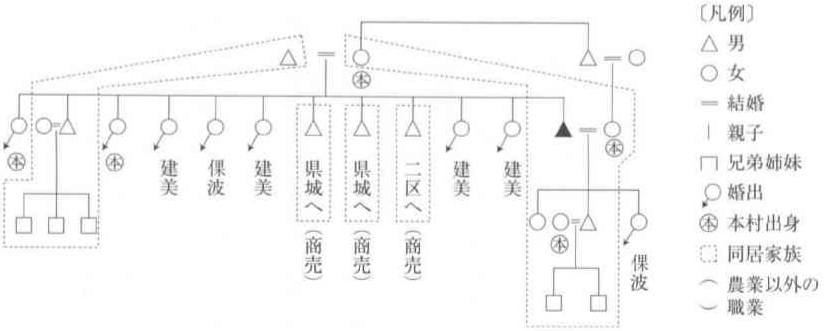
稀ではない。

現地での聞き取りによれば，西番族意識は，むしろ教育水準の比較的高い者や外部に出る機会の多い者ほど強く，自民族への関心が高いという傾向がみられる。例えば最も強く西番族であることを主張した一人である小学校教師のZX（女性・32歳）は，父はもと教師で，兄や弟も県城で商売をし，妹はN組で唯一の大専卒で県の観光局で働いているという，いわゆる比較的裕福で外からの情報も得やすい一家の者であった。また教師が強い西番族意識をもっているということは，当然，次世代の子供たちへの影響も少なくないといえる。換言すれば，N組の住民にとっては，西番族の末裔であるという意識は単なる歴史の記憶ではなく，集団の構成員であるための当然の，共有された認識であるといえよう。

3．西番族における祖先の歴史とポン教

では，彼らは何に拠って自らを西番族と意識しているのか。N組のS.D（男性・65歳）によれば，彼が属するSha（漢名で李）一族には口頭で祖先の歴史が伝えられており，この地に至ってすでに41代を経ているという。SDの一家は，Sha一族の中でも西番族のシャーマンであるパピを代々輩出してきた家系で，母方と父方の双方の祖父がパピであった。このように数十代にわたる家譜が口頭で伝承されていることは，西番の中でもナムイや

〔図2〕L.Y家



［注］尼瑪堡子の西番25戸は李が17戸，朱が6戸，伍と文が1戸。
［出所］2004年9月　現地での聞きとりにより作成。

ナムイに近いリルにみられる特徴であり，これ以外の川西南チベット族にはあまりみられない。SDによれば，Sha家の歴史はつぎのようである。

祖先は，まず印度を発って後藏に至った。故地は，後藏の普姆娜之谷である。しかし勃興してきた吐蕃と戦って敗れ，東へ逃れて西康省徳格県に至った。徳格で2代を経た後，一族会議が開かれて西方と南方の二手に分かれることになった。南に向かった一団は，雅礱江に沿って南下し，ついに九龍県子耳郷M村N組の地に辿りついた。九龍県は，三国時代に諸葛亮が8年にわたって地元の蛮族と戦った土地である。この戦いで住民のほとんどが根絶やしにされ，「蜀山蛮」の幾つかの集団のみが生き残った。ナムイはその後にここに至り，一部はさらに周辺の冕寧県や木里県に移った。また，初めてこの地に来た時，家畜がほとんど死んでしまったので，木製の工具を使って焼畑をし，ソバやチンクー麦を作った。後に300年ほど前に漢族がここに来てからは，漢族に水稲や大豆の栽培，養蜂，豆腐の作り方を学んだ。この地に来てからの41代はつぎのようである[1]。

ジョガムリ→ジョリ→ジュリ→ツリ→ヤワ→カイハイ→ザ→アンラ→チャント→クブ→ヲヤオ→ビシェ→ラエ→ムヒ→クヒ→ガンア→シュト→ヲフ→ヤア→ヲブ→ハカン→アビ→ブイリ→アダ→ドリ→ヨジュピ→パミ→ヤチュ→ジョチュ→マオピ→ナカ→ヤビ→ヤゴカ→フザ→アト→ニマザ→ソンゴビ→ニマンマン→サダビル→ヲガ→ソゴジャ

以上の伝承によれば，Sha家の41代は，一代を25～30年で計算すると，この地へは約千数百年前，唐代半ばの9世紀以降にたどり着いたことになる。また移住の理由は，西番族が吐蕃と敵対したからであるとする。すなわち西番族の来歴の伝承は，吐蕃と深く関わってるものであり，先住集団とは戦っていないこと，いなくなった後に定住したと伝えている。

同様に，隣接する木里県の倮波でも，シャーマンのニマチ（尼瑪赤，男性・45歳）が祖先の歴史を伝えている。ニマチは，代々，西番族のシャーマン「パピ」（帕比あるいは帕子）を出してきた家系で，現存する唯一の

(1) 冕寧県里庄区聯合郷鑼鍋底のナムイは45代の家譜を暗誦することができる。里庄にきてから25代，およそ750年余りを経ており，里庄からさらに一部が九龍や×，×にも移住したと伝えている（1982年）。

パピである。パピは，文字をもたない西番族にとってその歴史の記憶を口頭で伝える主要な伝承者である。祖先の移住の歴史は，パピによって葬式や「道場」（死後の法要）で死者の霊魂を祖先の地に送るための指路経の中で語られている。ニマチによれば，祖先の歴史はつぎのようである。

祖先は，印度から西蔵に行った。そこで戦いがあり，逃れて青海，四川の阿壩，甘孜の康定を経て，九龍についた。さらに九龍の桃子坪から一部が周辺の4つの土地に向かった。南東へは里庄（冕寧県）からさらに聯合へ，南西へは倮波，東へは甘洛や漢源，西へは雲南に移った。

子耳郷N組のSDと倮波郷のニマチが語る移住の歴史では，ともに印度→西蔵を起点とし，移住の理由を西蔵で吐蕃と戦って敗れたとする。また九龍（桃子坪）を四川での起点として，さらに一部が周辺に移住したと語る。ただし両者の西蔵から九龍に至るまでの経路は異なっている。子耳では徳格から雅礱江ルートで南下するのに対して，倮波では青海→阿壩→康定と大渡河ルートをとる。以上のように，彼らの歴史は，西蔵と吐蕃に関わる故地の部分と青海から四川にかけて大河に沿って南遷の部分から構成されている。

このうち西蔵を故地とする伝説は，西番とよばれた川西南チベット族の中では特異である。ギャロン・チベット族などチベット・ビルマ語群チャン語系の言語をもつこの一帯の集団は，祖先が西北から南下してきたとする指路経を共通してもっており，西蔵を目指すものはない。例えば木里のプミ・チベット族は，指路経では木里からさらに西北へと死者の魂を導く。彼らは，チベット仏教黄教を16世紀に受け入れて深く信仰してきた集団であり，西蔵のチベット族とは黄教を通して文化的共感を共有している。しかし祖先の移住伝承には，元来の西北からの南下経路を語り伝えている。

ただしギャロン・チベット族の土司層や雅礱江から大渡河に及ぶ広範囲の流域を支配した明正土司などかつての支配者側には，西蔵を故地とする伝説がみられる。それは，唐代にちょうどこの一帯が吐蕃に支配されたことから，支配者側が自らを吐蕃の末裔であると伝えることで支配の正統化を図ろうとしたのであろう。これに対して被支配者側の一般住民は，支配者側とは異なる，従来の西北を故地とする伝承をそのまま引き継いでいったものと考えられる。

では，彼らは祖先の歴史の記憶をどのように次世代に伝えていったのか。

冕寧県聯合郷M組での聞き取りによれば，祖先の移住の歴史は，祖先の霊魂を故地へおくりだす「引路歌」で語られる。ナムイは，祖先の霊魂を万能であると信じ，子孫や家畜の繁栄，豊作，自然災害からの保護を祈って篤く祖先を祀る。祖先祭祀には，主に3つある。死者を直接祀る葬式，死の直後あるいは数年後にパピを招いて位牌を祀る「俄熱力且」，パピを招いて数代の祖霊を祀る「尼姆」である。「引路歌」はこの祖先祭祀の時にパピおよび住民たちによって唱えられる。最初に歌われるのは，遺体を数日間，家屋に安置している時である。ブタやヤク，ウシ，ヤギなどの犠牲を捧げた後，「引路歌」が遺体に付き添う人々によってうたわれる。

ヤギをあなたのために捧げ，ヤクをあなたのために捧げ，ブタをあなたのために捧げます。一族全員があなたに別れを告げにきました。安らかにかの地に旅立ち，残された私たちが無事に病むことなく暮らしていけるようにお守りください…。西方へは，次の土地に沿って行ってください：拿卡阿侯莆 — 皮羅波 — 古 — 羅 — 阿里多卡扶 — 里金子果 — 羅呷呷布 — 阿者莫自倮 — 怕角倒 — 舒保木苦（九龍県）— 舒把雑（九龍県雅江）・・・尼瑪拉薩脚（現在のラサ）

ここで示される経路は，九龍を経てラサに至る道である。

さらに「俄熱力且」と「尼姆」では，パピが山神を招く経文を唱えた後，ヤクやメンヨウなどの犠牲の肉を煮て供え，再びパピが指路経「撮布盧沽」を歌って祖先の霊魂を故地である尼瑪拉薩脚（現在のラサ）に送る。

老人よ，ここはもうあなたの居場所ではなくなった，あなたの場所は日列来吉（甘孜の境），尼瑪拉薩脚（ラサ）です。ここはあなたの居場所ではありません，あなたの場所は普衣腊菊若（ヒマラヤ山一帯）です。ここはあなたの居場所ではありません，かの地への旅費（死者のために使う金）はもう払いました，ヤクをあなたのために犠牲にし，メンヨウをあなたのために犠牲にし，ブタをあなたのために犠牲にしました。一族全員が会いにきました，すべてのものをあなたに捧げました，出発してください，そしてあちらに行ったら，どうか残された子孫やムラ，一族の者に祟りをもたらすことのないように，我々が病むことなく無事にくらせるようにお守りください。

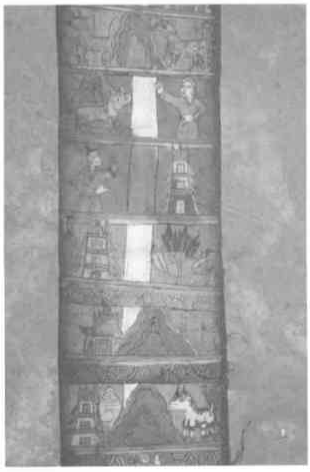
ここでは，故地に至る地名として甘孜とラサがあり，ラサよりさらに西方のヒマラヤ山脈を最終の地としてあげる。

以上の引路歌において重要なことは，一般住民がパピについてこれを斉唱することにある。言い換えれば，人生の最大のイベントである葬儀において祖先の歴史を語る引路歌を唱えることが集団の成員としての証でもあり，集団の歴史は，このような形で毎年，再生され，語り継がれてきたといえる。

4．西番族における「西行取経」

では，川西南の西番の多くが支配者側は西藏を，被支配者側は西北の地を故地とする異なる祖先伝承を伝えたなかで，なぜナムイ系の伝承は集団全体で西藏を故地としたのだろうか。パピが指路経を唱える時に用いる指路図「ツプリグ」（15m×6m，紙製）に描かれた西方への取経の旅では，西番族とガミ族（チベット族）および吐蕃との関係をつぎのように語る（写真2）。

昔，西番族はガミ族とともに経典を獲得するための旅にでた。しかし結局，真の経文を手に入れたのは西番族であり，ガミが手に入れた経典は偽書だった。ところが取経の旅の帰途に2人が大河を渡ろうとした時，ガミが突然，前方に熊がいると叫んだために，驚いた西番族は口に銜えていた経文を河に落としてしまった。ガミはそれを素早く拾って自分のものにしてしまい，そのまま持ち帰った。以来，ガミは西番族から奪った経典を用いて教えを説き，法事を行った。一方，西番族のパピは文字をなくしたために経文はすべて口頭で伝えるしかなく，真の経文を思いだすために羊皮鼓を敲いて唱えた。またガミはその後，ヤクやヤギなどの供犠を行わなくな



［写真2］
西番族のツプリグ「指路図」

ったが，西番族は盛んに家畜の供犠を続けた。

これは，いわゆる「西行取経」型の伝承で，チベット仏教が普及した地域で広くみられる仏教伝来の物語である[2]。このうちナムイのそれの特徴は，佛教の２つの宗派とその対立が語られていることにある。２派とは，文字で記された経典をもち，動物の供犠を行わない一派と，文字がなく，口頭によって伝承される経典をもち，動物供犠を行う一派で，前者はガミが信じる黄教，後者は西番族の黒教を示唆している。また西番族が文字をもたない理由をガミ族に文字で書かれた真の経典を奪いとられたからだとするのは，両者が厳しい対立関係の結果，西番族がガミに負けたことを反映している。そこには，仏教が伝来する以前のチベット人の宗教であったポン教が仏教との争いに負けて東へ移ったこと，西番族はそれを奉ずる集団であり，彼ら西番族こそが真のチベット人であるとする祖先の歴史の記憶が強く刻まれている。しかもこの伝承は，ポン教が聖地を「釈迦成道所下」（現在の四川省大金川河の章谷屯））とし，「（四川の）カム地方やアムド地方に古くからのポン教」が残されているという，ポン教の９世紀以前の伝承とほぼ一致している[3]。

では，西番族のいうポン教とはどのようなものなのか。そして，それは彼らにとってどのような意味をもっていたのか。N組のＳＤによれば，彼

---

(2) 冕寧県M組にはナムイのほかにパムイ（プミ）が共住しており，ナムイは諸方面にパムイの影響を受けている。「西行取経」はその典型的な例である。1982年の何耀華の調査によれば，M組の両者の関係はつぎのようである。

パムイのＹＬとＹＺによれば，老人の話では，かつて両者は婚姻を結ぶこともなく，敵対関係にあった，なぜならナムイは初めチベット族ではなかったからである。パムイにはチベット王が与えたタンカやチベット経典，寺院，独自の言語があり，自分達だけがラサからきたチベット族である。実は，ナムイにもタンカや経典があるが，それらはパムイが彼らに伝えたものだ。ナムイの宗教職能者パビは仏教寺院に行くが，パムイのアシェのようにそこで学ぶわけではない，と。

これに対してナムイは，パムイとは兄弟だとする。ＬＡによれば，彼の祖先はラサから移ってきて48代を経ているが，12代の時に長男のナムイと次男のナムイに分かれた。だからナムイはチベット族ではないという説にナムイは同意しない。またすでに婚姻関係が結ばれるようになって久しく，両者の関係はすでに密である。パムイのANも両者は兄弟であり，ともにチベット仏教の経典の経路によればラサから甘孜×を経て聯合郷のM，H，Wの各組に定住したと語る。同報告書でも，調査時に，両者はすでに同一の言語を用い，互いに婚姻関係を結び，ともにチベット仏教を信じて経典やタンカをもち，白石を崇拝しており，同一系とみなせるとする。

らのポン教では，かつて毎年1回行った「道場」（法事）で異民族を1人犠牲にして，「野人」に捧げた。さらに12年に1回「牛王会」を行って12人の異民族を犠牲にし，あわせて12年間に24人ずつ犠牲にした。そのためチベット仏教を信じる他のチベット族は，この犠牲を野蛮であるとして西番族との間に戦いをおこした。結局，西番族はこれに敗れて他の地に逃れた，とする。

また彼らはヤクやヤギ，ウマなど家畜の犠牲も必ず行い，死者の魂を故郷の地へ導くため，と説明する。しかしこれはポン教以外のチベット仏教各派では行っておらず，むしろチベット仏教を受容していないチャン系のチャン族やプミ族などの特長である。

さらに，パピは，西番族固有の宗教職能者であり，「ツプリグ」の伝承で示されたようにチベット文字を読むことはできない。N組の西番族は，元来，このパピを中心としたパピ教ともよぶべき固有の信仰をもっている。またN組にはチャン系集団に共通する山の神信仰や白石崇拝もみられる。家屋の屋上に安置された白石「ロ」や家内の神棚に祀られた山の神を象徴する石「アラ」，神山の山頂に置かれた山の神の石「ソム」がそれである。すなわち以上のような「死出の犠牲」や白石および山の神信仰などは，仏教伝来以前からもっていた土着の信仰に属する部分であろうと考えられる（写真3）。

しかし同時に，彼らはチベット仏教の影響も受けている。SDの姻戚で，やはり一族からパピを輩出してきZJ家には，タンカや法螺，鈴などのパピ

---

(3) 山口瑞鳳『チベット上』〔1988，149～169〕によれば，ポン教（黒教）はドゥルポン，キャルポン，ギュルポンの3つの時期に大別される。9世紀以前の伝承では，前の2つの時期は古くからのポン教と思われるもので，四川省のカム，アムド地方に残されているとされるが，どのような教義をもっているかは明らかではない。その後，「ポン教の伝統はいったん断絶した形で11世紀以後，仏教化したもの（ギュルポン）が主になって」今日の「完全に佛教の一派としての性格を身につけた」のポン教に続く，とする。筆者の現地での調査によれば，現在，四川西南のチベット地区で最も大きな勢力をもつ佛教は黄教である。黄教は，1580年に木里へ伝えられ，木里大寺が建立されて布教の中心となった。特に木里のチベット族の多数を占めるプミ（パムイ）は，木里大寺のお膝元の地にあって篤く黄教を信仰するようになった。ところがナムイやリルが伝えているのは黒教であり，丹巴のギャロン地区にも黒教寺院が多く残っている。ただし前者は，土着の信仰を色濃く残す，かなり早い時期にこの地域に伝えられたと考えられる初期のポン教であり，後者はチベット仏教各派の要素の濃い，第3時期のポン教であろうと推測される。

［写真3］
イロリの3つの石は男女の祖先と家の神を表す。酒食の前には必ず酒をそそいで祈る。

の法具が文化大革命の禍を逃れて保存されているが，それらは明らかにチベット仏教の法器である。すなわち西番族のポン教は，彼らが元来もっていた固有の信仰が外来の仏教の一部をとりいれた初期のポン教の状況を示すものと推測される。

よって西番族が西番族たる由縁，すなわちガミ族や他の西番とは異なるというアイデンティティは，まさに彼らのポン教に基づくものであるといえる。換言すれば，N組の西番族にとって西番は〔XiBo〕であり，西から来た〔bo〕である。〔bo〕とは〔Bod　pa〕（播巴）のことで，西藏自治区の衛蔵のチベット族の下位集団において最も広い範囲で用いられる自称である。漢族は彼らの自称boの音に蕃の文字をあて，さらに番と記して蛮の意味を付加し，蔑称として用いた。しかし子耳ナムイにとっては〔Xibo〕という従来の意味のまま今日まで伝えられている。そのため西番族は，自集団を西から来た〔bo〕であるとし，チベット仏教を受け入れる以前のポン教を奉じる，本来のチベット人であると主張してきたのである。

おわりに

川西南の「西番」は，人民共和国下の民族識別によりその大部分がチベット族となった。しかし九龍県のナムイだけは，60年代，80年代の民族識別工作をへてチベット族とされてもなお西番族であるという主張を続けてきた。それは，西番を蔑称とする政府側のカテゴリーとN組の西番族が伝えてきたそれとが大きく異なっているからである。西番の語は，彼らにと

っては〔Xibo〕であり，吐蕃との闘いを通して祖先が守ってきた「ポン教」を奉じる集団であることを意味しており，彼らのアイデンティティそのものであった。指路経および「ツプリグ」で語られる西番族の祖先の歴史の記憶は，彼らが自らを真のチベット人であると主張する主要な根拠である。またそれは明らかに歴史上の吐蕃と初期のポン教に関わるものであり，なお不明な部分の多い初期の「ポン教」を解明する上でも重要な資料になると思われる。

〔引用文献〕

石碩（2005）『藏彝走廊：歴史与文化』四川人民出版社
王明珂（2003）『羌在漢藏之間－一個華夏歴史邊縁的歴史人類学研究』聯経
格勒（2002）「氐羌南遷与普米族」『普米研究文集』雲南民族出版社　37～39
何耀華（1982）「冕寧県聯合公社藏族社会歴史調査」『雅礱江下遊考察報告』2～37
伍嘎（1982）「冕寧県聯合公社藏族的宗教」『雅礱江下遊考察報告』46～62
陳明芳等（1982）「冕寧県和愛公社庙頂地区藏族社会歴史調査」『雅礱江下遊考察報告』75～105
松岡正子（2005）「川西南の「西番」における民族識別（1）－プミ語集団の場合」『愛知大学国際問題研究所　紀要』第126号
山口瑞鳳（1987）『チベット』上　東京大学出版会

※写真（1）～（3）は，筆者撮影

Summary

The Nationality Identification of "Xifan" in the Southwest Sichuan (2): Memories of Xifan tribal History

MATSUOKA Masako

Xifan 西番 is the name which the Han race gave to the Tibetan people in the western part of China. Among them the subgroup of "Xifan" in the southwest Sichuan 四川 (southwesterm of Ganzi甘孜Prefecture) was a group having a language which belongs to Qiang language group, Tibeto-Burman language system of Han-Tibetan languages. These subgroups are divided into eight different language groups.They were once called "某羌Qiang", but after the area was occupied by Tubo 吐蕃 in the middle of the Tang Dynasty, they began to be called "Fan" or "Xifan" by the Han race.

Most of "Xifan" in the southwest Sichuan became the Tibetan tribe due to the national identification policy under the People's Republic. That was what many "Xifans" wanted as they deeply believed in Tibetan Buddhism and shared the same faith with the Tibetan tribe of Xizang 西藏. However Namui ナムイ of Jiulong 九龍 County alone continued to insist that they were the Xifan tribe even though they were incorporated into the Tibetan tribe through nationality identification activities in the 1960s and the 1980s. In this paper I explained the reason why they wanted to keep their identity as follows:

To Namuiナムイ of Jiulong County, "Xifan" was [Xibo], which means the true Tibetan coming from the west. The true Tibetan meant the group of people who believed in ancient Bon Religinボン教, which was a

religion before the other Tibetan tribes accepted Buddhism. The memories of ancient Xifan tribe which were handed down by 指路経 (sutra) and 神路図 Tuburigツブリグ tell the fact that their ancestors had dedicated themselves to and protected Bon Religinボン教 by fighting with Tubo who accepted Buddhism and the language of Xifan=Xibo was nothing but their identity. Furthermore SiFan which was a despised name by the then government had a completely different meaning to the Xifan tribe of Jiulong and they never agreed to change their name to the name of the Tibetan tribe.